

種時三番（再春松種時）

その昔秀づる鶴の名にし負ふ

都のぼりの折を得て

おしへ請地の親方に舞のけいこを志賀山の

振りもまだなる稚氣に忘れてのけし

三番叟

揉みだし繰出しひとかなで

芽出度う栄や仲蔵を

おくさへ喜びありや喜びありや我この所より他へはやらじと思ふ

偽紫もなかにおよばぬ筆に写し絵も

いけぬ汀の石亀やほんに鶺鴒のまね鳥飛び

とつぱひとえに有難き

花のお江戸の御ひいきをかしらに重き立烏帽子

アラめでたや物に心得たるあどの太夫殿にそとけんぞうもうす

丁度まいって候

あどの太夫殿をお見立て申して候

なんと御らんじ候や

福人とお見立て申して候

また色の黒き尉殿をお見立て申して候

なんと御らんじ候や

徳人とお見立て申して候

ヤ仰也の如く

徳人の中にても

子徳人にて候

十人の子供等を

車座にならべ一時は名をつけて候

なんと御付候ぞ

まつおつとりちがへ

おとよけさよ

辰松ゆる松だんだらいなごに

かいつくひつつく

火打ぶくろに

ぶらりと付て候

あら目出度や

その若子たちの祝月

一だんと賑はしき事に思はれて候

先あどの太夫どのにはおもと元の座へ御直り候へ

まつ色の黒き尉殿には一舞御舞候へ

いやいや御直りのうては舞ひ候まじ

いやいや御舞候へ

いや御直り候へ

あゝらようがましやたあらば鈴を参らしよう

そなたこそ

天の岩戸のなア

神楽月とて

祝うほんその歳も

五ツや七ツ見しよう

縫の模様のいとさまに

竹に八千代の寿こめて

松の齡の幾万代も変らぬためし鶴と龜

ぴんとはねたる目出鯛に

海老も曲りし腰熨斗目

宝づくしや宝船

やら芽出度のえん

四海波風おさまりて常盤のえん木の葉も繁る

えいさらさ

鯉の滝登り牡丹に唐獅子唐松を

見事にみごとにさつても見事に手をつくし

仕立ばえあるよい子の小袖着せてきつれて

まいるかの肩車にぶんのせて

乗せてまいるの氏神詣できねが鼓の

でんつくでん

笛のひしぎの音もさえたりな

さえた目元のしほらしき

中のなかの中娘をひたつ長者が

嫁にほしいと望まれて

藤内次郎が

栃栗毛にのつてエイ

えつちらおつちらわせられたんでその意に任せ

エ、エ、エ、申した

さて婚礼の吉日は

縁を定めの日を選び

送る荷物はなにやらな

瑠璃の手箱に珊瑚の櫛笥

玉をのべたる長持にかずも調度いさぎよく

様はなあ百までなあえ

わしや九十九までなあえ

なんの性でえ

共になあ白髪のなあえ

生ゆる迄なあえ

嫁とはいえど

世間見ず駕籠の内外の思惑が

恥かしみじみ案じられ

初に添寝の新枕かはす言葉も何とてどうして宵のくちと口

互ひに手さへ鶏鐘の

声が取持ちよう、と明けゆく空を月にして

妹背むすんで女夫仲

むつまじ月と岩田帯

やがて孫彦玄孫をもうけ末の楽しみこのうへや

心浮立つ踊り唄

欲しかおましよぞ

一ト枝折りてそりや誰に

いとし女郎衆のかざしの花にほうやれ

恋の世の中面白や

すぐにもあがり御目見得を

又こそねこう種時や

千秋万歳

万々歳の末までも

賑はふ芝居と舞納む。